



“鎌倉楽しむ会 “2019”

浅草寺から稲荷町の散歩



- ◆ 開催日 : 2019年11月27日(水)
- ◆ 集合場所 : 浅草・雷門前
- ◆ 集合時間 : **午前9時30分**
- ◆ 解散時間 : 午後2時30分頃
- ◆ 昼食 蕎麦処・翁庵 (午後1時前後)
- ◆ 参加費 : 500円 (資料代、保険代含む)
- ◆ 散歩コース

浅草文化観光センター／浅草寺／浅草神社／被官稲荷神社／凌雲閣跡／
かっぱ橋道具街／日輪寺／天獄院／海禅寺／曹源寺／法善寺／報恩寺
聖徳寺／誓教寺／永昌寺／下谷神社／ **昼食・翁庵** ／アメ横・徳大寺

・江戸時代「観音さま」といえば、浅草寺の観音であり、当時の庶民の信仰のメッカであり、また江戸時代を通じて市民のレジャーの中心地だった。

・浅草寺の門前は平安時代までさかのぼれるという。徳川家康が江戸入府した天正18年(1590)には、かなりの賑わいを見せていた。しかし、その頃の浅草は江戸の町とはポツンと離れた田圃地帯にあり、江戸の町並みとは独立した街だった。江戸市中と浅草を結ぶ奥州街道の道筋に町家が続くようになるのは承応年間(1652～55)で、その頃浅草は江戸市街に編入された。

・元禄期(1688～1704)になると浅草寺境内とその周辺部は盛り場になってくる。江戸中期には浅草寺の南部は町家と多数の寺院が占めていたが、浅草寺の北部は「浅草田圃」と呼ばれる広大な田圃地帯が広がっていた。

・その浅草田圃に明暦3年(1657)の振袖火事の後、日本橋にあった吉原が移転してきた。初期には武家が編笠姿で馬に乗って通う遊郭であったが、その後経済力を蓄えた町人たちの遊興の場として、独特の情緒の文化が

開花した。天保末(1842～)には猿若三座が芝居興行をはじめると、浅草は単に信仰の場であることに加えて、いろいろな顔を持つ行楽街、繁華街としていよいよ盛んになった。

・明治になっても浅草の繁盛は変わらず、十二階・六区などの新たな歓楽街も出現した。活動写真の大流行とともに、浅草オペラ、軽演劇、レビューの興行は田谷力三、ロッパ(古川緑波)、エノケン(榎本健一)、シミキン(清水金一)、ターキー(水の江滝子)らのスターを生み、その伝統はデンスケ(大宮敏光)、渥美清、萩本欽一、坂上二郎、ビートたけしに引き継がれていく。

・浅草は江戸の名残と情緒が色濃く残る下町の代表的なアミューズメントセンター、庶民的で心休まる行楽地としても人気があり、近年は外国人には抜群の人気を誇っている。

・三社祭やほうずき市の人出は100万人を超すという。浅草寺の境内に残る数々の文化財や建造物、仲見世をはじめ、この地ならではの老舗、江戸や戦前の雰囲気と味を伝える飲食店も多い。(江戸・東京 歴史の散歩道より)

1) 浅草文化観光センター



・新国立競技場も手掛けている建築家の「隈研吾」さんの作品です。デザインの意図について「隈」さんは、「敷地が広くないため、ペンシルビルにならないよう、また浅草の街並みに合うことに配慮して、平屋の家屋を縦に積み重ねたようなデザインにしたと述べています。

・右の写真は、8階展望台から一望できるスカイツリーやビル群



2) 雷 門



・左右に風神・雷神を祀ってあるところから風雷門と呼ばれていたが、いつの頃からか略して雷門と呼ばれるようになった。広重の錦絵に描かれた雷門は慶応元年（1865）に焼失し、その後長い間再建されなかった。地名としての雷門は全国的に有名だったが、門そのものは存在しないので「名があっても実態のないものの横綱」と言われていた。

・昭和35年5月、95年ぶりにパナソニックの創業者松下幸之助翁の寄進によって再建された。風神雷神の頭部は慶安年間（1648－52）の作、胴以下は明治8年（1875）に補刻されたものである。

・昭和53年（1978）“開帳1350年を記念して、門の裏側に「平櫛田中」（ひらぐしでんちゅう）作の「天竜・金竜」の二神が安置された。



3) 伝法院と庭園



・伝法院は浅草寺の本坊であり（国重文）、浅草寺が天台宗に属していた頃は輪王寺宮の御隠殿としても使われたことがあった。庭園は寛永年間（1624-44）造園の名手といわれる小堀遠州の作と伝えられ、江戸名園の一つにあげられる。北東と東西に大別された回遊式庭園です。（国名勝）

・庭園内には至徳4年（1387）の銘がある至徳の鐘、古墳時代の石棺がある。

・今でも庭園の中にいると、この周囲がとても浅草の繁華街とは思えないほどの静かさで心が安らぐ。

4) 二天門



- ・国重要文化財。浅草寺に東照宮が建てられた元和 4 年（1618）に、東照宮の隨身門（寺院の山門にあたる）として建造されたものです。
- ・「増長天・持国天」の二天を祀るので、この名がある。扁額の文字は、公卿の三条実美（さんじょうさねとみ）が揮毫したものである。

5) 浅草神社



- ・三社様と親しみをこめてよばれる浅草の総鎮守。草創は平安時代の後期、又は鎌倉時代といわれる古社。江戸時代は田圃の中の霊域だった。
- ・三社様は網にかかった聖観音像を引き上げた「檜前浜成、竹成」（ひのくまのはまなり、たけなり）兄弟と、自ら出家して家を寺とし、水中から示現された聖観音を奉斎した「土師中知」（はじのなかも）を、その後の子孫たちが祀ったといわれる。
- ・拝殿、幣殿、神殿からなる権現づくりの社殿は、慶安 2 年（1649）三代将軍家光が建てた。関東大震災に耐え、戦災にも焼けず奇跡的に江戸初期の建築物として残っている。国の重要文化財に指定され、浅草三社祭は 5 月中旬に行われ多数の人出でにぎわう。
- ・網のマークは、浅草神社の社紋となっている。

6) 被官稲荷神社



- ・幕末の江戸の侠客・新門辰五郎の妻が病気にかかり、京都・伏見稲荷大社に祈願したところ快癒した。その御礼に伏見稲荷大社の分霊を江戸に勧請し祀った。建物は安政 2 年（1855）に建てられた。
- ・前方の御影石の鳥居は安政 2 年 9 月辰五郎の奉納の銘がある。玉垣には中村仲蔵など歌舞伎役者の名がみられ、被官とは出世に通ずる意で、花柳界や芸能関係者の参拝が多いようです。

7) 浅草・凌雲閣跡



- ・浅草十二階といって、東京帝国大学教授のイギリス人・ウィリアム・K・バートンの設計を基に赤レンガ 330 万個を使って建てられ、高さ 60 ㍎あった。明治 23 年（1890）11 月から大正 12 年の関東大震災で崩壊するまで十二階と呼ばれ、歓楽街浅草のシンボルタワーとして人々から親しまれた。当時は東京のどこからでも見えた。日本で初めての吊り上げ式エレベーターが取り付けられた。

8、日輪寺

- ・平将門ゆかりの寺で、宗派は時宗。知る人ぞ知る有名なお寺です。一遍上人と遊行念仏をされていた、時宗第2祖他阿・真教上人が、将門の首塚に「蓮阿弥陀仏」の法号を徳治2年（1304）に贈り、自ら揮毫した板碑を建立し、日輪寺を神田明神の別当寺とした。
- ・江戸時代に入り、江戸城の拡張により移転を繰り返し、明暦の大火（1657）に現在地に鎮座した。
- ・その真教筆による「南無阿弥陀仏の塔」が境内に再建されている。

9、天嶽院

- ・草創は天正年中（1573-92）で、浄土宗です。
- ・江戸後期の儒者・細井平洲の墓がある。平洲は享保13年（1738）の生まれで、米沢藩主・上杉鷹山（うえずぎょうざん）の師である。米沢藩藩校・興譲館を興して米沢藩士の士風を振興し、鷹山の藩政改革を助けた。
- ・晩年には、尾張藩の明倫館の侍講を勤めた。平洲は弁舌さわやかで、その軍談は人気があったという。「平洲小話」などの著書がある。

10、海禅寺



- ・臨済宗妙心寺派の寺院です。平将門が常陸国相馬郡に草創した。将門の死後荒廃していたのを慶長のはじめ（1596頃）再興され、後に江戸湯島に移された。明暦の大火後現在地に移された。
- ・陸奥宗光（むつむねみつ）の菩提寺。宗光は明治の初め第2次伊藤内閣の外務大臣を務める。次男の潤吉は古河家の養子となり、古河財閥2代目当主となっている。

- ・また、梅田雲濱（うめだうんぴん）の墓がある。雲濱は文化12年（1815）の生まれ、若狭（京都）小浜藩士だったが、嘉永5年（1852）に藩政を批判した「海防策」を建白して、士籍を剥奪された。赤貧のうちに勤王志士たちと交わり、「妻は病状に付し、子は飢えに叫ぶ」は雲濱が自己の生活を謳ったもので、当時の勤王志士たちに熱唱された。
- ・徳川斉昭を将軍に就任させようと画策したり、ロシア艦を襲って攘夷を実行しようとした。幕府から危険人物とされ、安政の大獄の最初の逮捕者になり、安政6年（1859）獄舎で病死してしまう。



11、曹源寺



- ・通称を「かっぱ寺」という。曹洞宗の寺で、天正16年（1588）に和田倉に創建。湯島天神下に移り、明暦の大火後現在地に移る。
- ・この付近は低地で、水はけが悪い土地柄だった。文化年間（1804～18）雨合羽を商う合羽屋喜八、通称合羽川太郎が私財を投じて治水工事を行い、住民の難儀を救った。
- ・その時、川太郎に恩義のあった、隅田川のかっぱが大挙押しかけて工事を手伝ったという。そして、かっぱを見たものも商売繁盛間違いなしとも言われ、河童は福の神として祀られるようになった。

1 2、源空寺

・もと湯島にあったが、明暦の大火後現在地に移った浄土宗のお寺。伊能忠敬、高橋至時（よしとき）、高橋景康（かげやす）、幡随院長兵衛、谷文晁らが眠っています。

・伊能忠敬の墓（国史跡）は角石の正面に、「東河伊能先生之墓」とあり、他の三面を佐藤一斎の撰文で埋めている。忠敬は50才で一念発起し、暦学を20才年下の高橋至時に学び、精確な日本地図を作った。死後は自ら望んで師の高橋至時の墓の隣に葬られた。

・高橋至時の墓（国史跡）の正面には「東岡高橋君墓」とあり、至時は東岡と号し、明和元年（1764）生まれ、寛政7年（1795）幕府天文方になり、浅草天文台の監督、寛政の改暦を完成した。伊能忠敬に測量術後を教え、日本全図の作成を指導した。

・高橋景康の墓は至時の墓の入口にある。景康は天明4年（1784）生まれ、父と同じ天文方を勤め、伊能忠敬の日本地図製作に力を貸し、間宮林蔵の樺太探検を支持している。文政11年（1828）天文方書物奉行の時、伊能忠敬の「日本地図」とシーボルトの「世界周航記」などと交換したことを冤罪に問われ、翌文政12年獄死した。



・幡随院長兵衛は歌舞伎などでよく知れ、「江戸で男とたてられた、男のなかの男一匹」と強きをくじき、弱きを助ける侠客として江戸っ子の人気者。墓は地蔵形で、「慶安三庚寅四月十三日善譽道散勇士」と刻まれている。浅草花川戸で人入稼業を営んでいた長兵衛は、町奴の頭目として旗本奴と張り合い、旗本水野十郎左衛門に風呂場で殺害された。慶安3年（1650）長兵衛36才のときである。幡随院との名乗りは、長兵衛が私淑していた向導和尚が幡随院の住職をしていたことからといわれる。

・谷文晁の墓（都旧跡）は正面入り口近くにあって、正面に「本立院法眼生譽一如文晁居士」と刻んである。

・谷文晁は宝暦13年（1763）根岸に生まれ、諸国を巡遊して風景画を研鑽し、山水、花鳥画にも優れていた。松平楽翁の知遇を受け、太田蜀山人、亀田鵬齋とも交友があり、門下生には渡辺崋山などがいる。

1 3、法善寺



「江戸名所図会」の著者・斎藤家三代の墓（都旧跡）が境内左側路地の奥にある。斎藤家は代々神田雉子町の名主を務める家柄。「江戸名所図会」は祖父・長秋（寛政11年没）が筆を起こし、父莞斎（かんさい・文政元年没）が校訂し、孫の月岑（明治11年没）が補筆して出版にこぎつけた。着手してから40年の年月が費やされている。天保7年（1836）に出版された「江戸名所図会」は長谷川雪旦（はせがわせったん）の挿絵入りで、当時の江戸とその周辺の神社・仏閣・名所・旧跡や風俗を説明した地誌で、当時を知る貴重な資料となっている。

・墓はすでに無縁で、長秋等の遺品・著作類は、寺は幾度か焼けたために、一切残っていないという。

1 4、坂東報恩寺

・建保2年（1214）親鸞の弟子・性信により茨城県水海道に開基し、文化7年（1810）に移ってきた。

・毎年1月12日に行われる「俎開き」で知られる。古式ゆかしい荘厳な儀式で天福元年（1233）から連綿と今日まで続いている。



15、聖徳寺



・昔、聖徳太子16才の自刻の像を安置した上宮太子堂（ともに関東大震災で焼失）があったので有名だった。玉川兄弟の墓（都旧跡）がある。徳川4代将軍家綱の時、江戸の水道が神田上水だけでは賄いきれなくなり、松平信綱を総奉行に、羽村の豪農で上水の設計者玉川庄右衛門、清右衛門兄弟に命じて工事を始めた。工事は難工事で2度ほど失敗したが、承応3年（1654）安松金右衛門によって成功し、羽村から四谷大木戸までの全長40キロが掘削され、江戸市中へ送られた。幕府は、兄弟の効を賞し、玉川の姓を贈り、上水にもその名をつけた。

・境内の一角に囲いがされて、玉川家先祖代々墓とともに、戒名「隆宗院殿贈従五位正譽了覺大居士」の庄右衛門墓、「接取院殿贈従五位光譽照山大居士」の清右衛門墓がある。

・玉川上水は明治23年（1890）東京市上水道が完成すると、それまでの東京の飲料水を供給していた玉川用水は廃止された。「玉川兄弟」については小説にも詳しく書かれている。

16、誓教寺



・「富嶽三十六景」「北斎漫画」など傑出した才能の世界的に有名な浮世絵師・北斎が眠っている。90年の長い生涯を通じて刻苦勉励し、文化2年（1805）に11代将軍家斉の前で谷文晁と席画を披露するほど高名な画家だったが、奇行が多く貧困の中で亡くなった。墓石の正面には「画狂老人之墓」と書かれ、「ひと魂のゆく気散じや夏の原 行年九十」と辞世の句が刻まれている。

17、永昌寺



・浄土宗寺院。永禄元年（1558）の創立で、肥前平戸藩松浦家の菩提寺であった。本堂の左側に「講道館柔道発祥之地」と記した自然石の碑が建っている。

・この永昌寺で嘉納治五郎は明治15年（1882）2月、講道館柔道の名で、わずか12畳の座敷で柔道の稽古を始めた。ここに道場を開き、柔術を教えた機関はわずか10ヶ月だったが、近代柔道の黎明期といえる。

18、下谷神社



・天平2年（720）行基菩薩が京都の藤森稻荷を勧請し、下谷稻荷と称したのがはじめといわれる。平将門を討った藤原秀郷が参籠したという伝説があり、江戸時代から下谷辺りの鎮守社として崇敬されてきた。

・寛永4年（1627）上野の山より東坂下に、延宝8年（1680）に旧広徳寺前に、昭和3年に当地に移った。現在の社殿は昭和9年（1934）4月建造のもので、拝殿天井絵は横山大観筆の墨絵雲龍図である。千貫神輿は有名である。

・7代将軍家継の生母・月光院はこの神社の氏子だった。家継は虚弱だったので、将軍の健康を祈願して、正徳4年（1714）に神輿を奉納した。しかしこの神輿は関東大震災で焼失して今は無い。

お昼の食事処

上野 翁庵



- ・創業は明治32年
- ・築70年の昭和を感じる雰囲気のお店
- ・蕎麦家さんにも愛されているお店
- ・外人さんも気軽に楽しんでいる

* 昼食後の散策（参加自由） *

イ、五条天神社旧地跡



・この地は、五条天神社の別当、ならびに幕府の連歌宗匠を務めた瀬川家が寛永15年（1638）より屋敷を構え、元禄10年（1697）から大正時代にかけては五条天神社が鎮座していた所である。

・五条天神社は薬祖神としての信仰をあつめた神社で、室町時代の中期には上野山に鎮座していることが明らかな、台東区内でも有数の古社である。江戸初期までの鎮座地は、現在の上野公園内摺針山上、さらには同公園南付近（黒門脇）と伝えている。

・こうした遷座は、寛永2年（1625）以後の寛永寺の諸堂、同8年の摺針山における清水観音堂など寛永寺造営工事にからむものと思われる。元禄10年（1697）に五条天神社が当地（瀬川家屋敷）に移されると、やがて、この地は「五条天神門前」という町家が形成され上野広小路の一角としてにぎわった。

・大正時代には国鉄の敷設工事や関東大震災にともない、その都度付近への遷座を余儀なくされたが、昭和3年上野公園西端の地に新造し、この地から移っていった。（説明板より）

ロ、摩利支天 徳大寺



・徳大寺は江戸時代の寛永年間（1624-44）に創建されました。御本尊は仏教の守護神といわれる「開運大摩利支尊天」を奉安しています。堂宇は大正12年の関東大震災、昭和20年の戦災による火災類焼によって灰燼に帰しましたが、奉安の御尊像は幸いにも焼失を免れてきました。

・昭和39年堂宇再建の悲願が結実され今日の姿に至りました。本堂正面の扁額「威光殿」は、威光の化身たる大摩利支尊天の拝殿の意として、吉田茂元総理大臣の揮毫によるものです。

・寛永の時代より凡そ400年寺社町として栄えた上野広小路の地に残る最後の寺院として、有縁の清衆の現世安穏後生善処の淨願を祈念しています。（徳大寺 HP より）

東京都台東区浅草1丁目 付近



1 : 4,800 相当

地図上の1センチは 約 48 メートル
印刷中心は 東経 139度47分34秒 北緯 35度42分4

東京都台東区松が谷2丁目 付近



1:4,800 相当

地図上の1センチは 約 48 メートル
印刷中心は 東経 139度47分 7秒 北緯 35度42分4

浅草寺関連の「覚書き」の①

令和元年 11 月 27 日記

鎌倉楽しむ会 清藤 孝



松尾芭蕉
「花の雲 鐘は上野か 浅草か」
現在も朝 六時に時を告げている

弁天山の「時の鐘」



高村光雲作 『龍神像』
天井絵 「墨絵の龍」
(東昭光)

おみずや
水舎



* 浅草寺の扁額 *

「施無畏」(せむい)

人々の不安や恐怖をとりのぞき「畏れ無きを施して」下さる。施無畏とは観音様のおはたらきそのものを意味する。

浅草寺ご本堂の天井画

堂本印象 「天人の図」	川端龍子 「龍の図」	堂本印象 「散華の図」
------------------------	-----------------------	------------------------

浅草寺関連の「覚書き」の②

令和元年 11 月 27 日記

鎌倉楽しむ会 清藤 孝

浅草寺本堂向拝の聯の意味
こはい

真如（しんによ）の世界はとても形などで表
すことはできないが、見事に整えられた伽藍や
自然の妙は、これこそ仏の浄土「安楽刹」であ
り、観音様の世界「補陀落（ふだらく）」であ
るという意味です。

ふんどう
豊道春海 書

（浅草寺ホームページより）

実相は莊嚴に非ざれども金碧装いなす安楽刹

実相非莊嚴金碧装成安楽刹（右）

真如は表象を絶すれども雲霞画き出す補陀山

真身絶表象雲霞画出補陀山（左）



外陣の聯



『誰でも、どこから来た人でも分け隔て
なく救いの手を差しのべてくださる』の
意

（浅草寺ホームページより）



十方來人皆對面（左）



仏が圓滿を背相（右）